

保健教育

田野原 佑美・後藤 美由紀

1 研究主題との関連について

(1)「教科等本来の魅力」について

保健教育とは、学校保健の中で保健管理と併せて行われるもので、「保健体育」（小・中学校）や「保健」（高校）を中心とした関連教科等で学習指導要領に基づいて行われる保健学習と、特別活動における集団を対象としたものと保健室や学級で個別の児童生徒を対象に行われるものからなる保健指導に分けられる。

東雲小・中学校では、養護教諭による学級単位の授業を実践していることから、研究の領域名を『保健教育』とし、児童生徒が自らの心身の健康課題に向き合い、その課題解決に向けて実践・変容意欲を高めることのできる授業の実践・研究を進めている。

保健教育の目標については、文部科学省の『改訂「生きる力」を育む小学校保健教育の手引き』（文部科学省、2019）、『改訂「生きる力」を育む中学校保健教育の手引き』（文部科学省、2020）の中で以下のように述べられている。

○児童（生徒）が身近な生活における健康に関する知識を身に付ける、必要な情報を自ら収集し、適切な意思決定や行動選択を行い積極的に健康な生活を実践することのできる資質・能力を育成することが大切。

○生活環境の変化に伴う新たな健康課題を踏まえつつ、児童生徒が積極的に心身の健康の保持増進を図っていく資質・能力を身につけ、生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎を培うこと。

○小学校教育においては、各学年の発達の段階の特徴を考慮して、身近な生活における自己の健康課題に気づき、その問題解決に向けて自ら取り組み、健康な家庭や学校づくりに貢献するための資質・能力の基礎を育成することが大切。

○中学生では心身の発育発達が著しく、性的な成熟も進み、自我意識も高まってくる。しかし、食生活などの生活習慣が乱れたり、さまざまな健康情報や性・薬物等に関する情報の入手が容易になったりと、大きく生活や環境が変化する時期でもある。そのような時期に自他の健康課題を発見し、その課題解決に向けて自ら取り組み、健康な家庭や学校づくりに貢献するための資質・能力の基礎を育成することが大切。

上記のような様々な目標をふまえ、我々は保健教育（本校においては集団保健指導）の本来の魅力を以下のように考えた。

身近な健康課題に気づき、その健康課題の解決に向けて主体的に必要な情報を得たり自他の意見を交流したりすることで新たな知識や視点を獲得することができる。

また、発達段階に応じてその学びを意思決定や行動選択に活かしながら、生涯にわたって自他の心身の健康を保持増進するための基盤となっていく。

(2)「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」について

(1)に述べた魅力に迫るための授業に必要な養護教諭の専門性・特質・役割を活かした資質・能力を東雲小・中学校の研究主題に基づき以下の表のようにまとめた。

表1 養護教諭の専門性・特質・役割を活かした授業づくりにおける教師の資質能力の視点

資質能力	視点	教科等が考える「教師の資質能力」の視点
授業構想力	目標設定	・保健室内外で得られる様々な学校保健情報から対象集団の健康課題を把握する。 ・多様な現代的な健康課題についての視点を持つ。 ・各学年・学級の実態・健康課題に応じた目標設定を行う。
	教材研究（開発）	・他の教員と連携をとり、学習指導要領に基づいて各教科等での既習内容や系統性をふまえた指導内容を考える。 ・科学的根拠をふまえ、児童生徒の思考の流れに沿った展開を考える。 ・学校医やカウンセラー、栄養教諭、その他地域の専門機関等、適切な専門家と連携する。
授業実践力	指導技術	・児童生徒が思考を深めるための展開に併せて、必要な科学的根拠をわかりやすく提示・解説する。 ・主体的な健康課題解決能力を育成するために、行動変容のための実践的な知識・技術を提示する。 ・個々の児童生徒の特性に応じたユニバーサルデザイン（視覚支援・ワークシートの作成等）を取り入れることを意識する。
授業分析・評価力	授業分析評価	・授業計画や発話記録等を含んだ実践記録により、児童生徒の行動変容に対する効果を検証する。 ・授業中の発言やワークシートへの記入内容と授業前後の児童生徒の言動を結び付けて分析する。 ・他の教職員・保護者などと連携して授業前後における児童生徒の変容を見取り、指導の効果を検証する。

東雲小・中の研究主題の中で述べている逆向き設計論では、まず求められている結果を明確にし（第1段階）、次に学習者による目標達成度の評価方法を考え（第2段階）、その上で目標達成のための授業を構想し実践する（第3段階）という3つの段階を踏まえて単元を意図的に設計することが求められる。

保健指導においては「求められている結果を明確にする」ために、保健室内外で得られる様々な情報から児童生徒の健康課題を見出すことがスタートとなる。見出された健康課題から「求められている結果」として児童生徒がどのような意思決定ができるようになる必要があるのかやどのような行動変容が生じる必要があるのかを考え「求められている結果」の姿をイメージしながら授業を構想し、実践していくのが第3段階となる。その際に、あらかじめ学習者による目標達成度の評価方法を考えておき、授業実践と評価の一体化を図る。これらの過程は、従来の保健指導における授業づくりと同じであるが、第2段階の目標達成度の評価方法を考えるうえで、保健指導が生涯にわたる健康への意識や態度の育成を目指すものであることに留意する必要がある。単発の授業であってもその成果や効果に関して授業内または授業直後の評価のみで必ずしも十分であるとは言えないだろう。そのため、評価の観点に配慮・工夫が必要であり、短期的な検証だけでなく授業後の学校生活の中で中・長期的に評価することも必要であると考ええる。

2 本年度の研究計画

保健教育領域では、保健室内外で見取った児童生徒の実態から構想した集団保健指導を行うことに

より、主体的に自他の心身の健康を保持増進するための行動が選択できる子どもの育成を目的として、以下のように研究を進めることにした。

《中学校》

(1) 研究の目的

エゴグラム(杉田, 1998)により自己の内面をグラフという形で客観的に見ることで自己理解を深め、さらにその結果を肯定的に捉えられるようリフレーミングしたり、他者との肯定的な交流を行ったりすることにより、自己の内面を肯定的に捉えることができるようになることを目指す。

(2) 研究の方法

中学校2年生を対象に、以下の内容で授業を実施する。

第1時 エゴグラムを作成することにより自己の内面を客観的に捉え、その結果を「推しキャラ」として肯定的な言葉で表現する

第2時 エゴグラムから得られた自己の肯定的な部分「推しキャラ」の特徴をストロングポイント(＝強み, 特長)と捉え、班で自他のストロングポイントを探す活動を通して肯定し合う体験をする

(3) 検証の方法

授業の前後に、自己肯定意識尺度(平石, 1990)から「対自己領域(自己受容4項目)」「対他者領域(自己閉鎖性・人間不信8項目, 自己表明・対人的積極性7項目, 被評価意識・対人緊張7項目)」の計26項目を抽出したアンケートを実施し、自己肯定意識尺度の対他者領域の項目を用い、評定値の事前事後比較を行う。また、授業後の感想記述分類についても分析を行う。

【引用・参考文献】

文部科学省(2019), 『改訂「生きる力」を育む小学校保健教育の手引き』

文部科学省(2020), 『改訂「生きる力」を育む中学校保健教育の手引き』

杉田峰康(1998), 『教育カウンセリングと交流分析』, チーム医療

平石賢二(1990), 「青年期における自己意識の構造－自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康」, 『教育心理学研究』, 38巻, 320-329

平石賢二(1993), 「青年期における自己意識の発達に関する研究(Ⅱ)－重要な他者からの評価との関連－」, 『名古屋大学教育学部紀要』, 40巻, 99-125